

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在校生・卒業生インタビュー]

“全力プレイ、全力疾走、元気” 監督の教えを胸に、プロの世界へ

東北楽天ゴールデンイーグルスから2位指名。
創部以来、初の高卒プロ野球入り！

●関西大学第一高等学校 3年
西田 哲朗 さん

昨年10月のプロ野球ドラフト会議で、関西大学第一高等学校3年の西田哲朗さんが、東北楽天ゴールデンイーグルスから2位指名を受け、関大一高野球部創部以来初の高卒プロ入りを決めた。キャプテンとしてチームを率いてきた西田さんは、甲子園出場こそ果たせなかったものの、高校3年夏の府大会1回戦でサイクル安打を放つなど、勝負強さを備えた選手。野球部での取り組みやプロ入団への意気込みについて話を聞いた。



プロ野球ドラフト会議の日、西田さんは報道陣が集まる会見場の隣室でひとり待機していた。時間がとても長く感じられ、指名されていないのではと思い始めたとき、歓声があるのが聞いた。瀬野崇史監督が入ってきて「2位や、楽天や！」。かなりびっくりした。嬉しかった。監督と黙って握手を交わした。

瀬野監督との出会いは高校2年生のとき。第一印象は「熱血的」。元気さや熱血ぶりは、西田さんが「自分に足りない」と感じていた部分であり、それを監督の姿勢から学んだ。特にキャプテンに選出されてからは、毎日のように監督と話し合い、そのあり方やリーダーシップについて教わり、実行し、精神面を鍛えていった。「自分のことばかり考えている成長しない。キャプテンとして常に冷静であるよう努め、チームメイトのこともよく見るようにした。「自分の練習が後回しになるのは辛かったけれど、得るものがたくさんありました」。チーム全体に気を配ることに伴い、自身の成績も伸びていったという。

関大一高野球部のよさはと聞くと、「『マナーのよさ』に自信があります」と返ってきた。チームがバラバラになった時期、西田さんは率先して“話し合い”の場を設けた。チームメイトと昼休みや練習後に集合し、意見をぶつけあい、「まず、自分たちにできることは何か」を考えた。そして、一見野球とは関係ないが、「マナーを意識する」ことから始めてみた。「電車でのマナーを守る、ゴミが落ちていたら拾う…これが僕たちのチームの持ち味になりました。チーム全員で物事に取り組むことで一致団結でき、周囲も応援してくれるようになったんです。『野球だけ



西田 哲朗—にしだ てつろう

■1991(平成3)年、大阪府茨木市生まれ。2007年関西大学第一高等学校入学。小学生のとき、関大一高のOBである久保康友投手(阪神タイガース)が甲子園で活躍する姿を見て、野球を始める。180センチ、76キロの体格を生かした長打力が持ち味。高校通算37本塁打、100を超える盗塁も記録し、走攻守揃った選手として注目されている。右投げ右打ち。守備位置はショート。

ではない」ことは、我が校ならではのよい面だと思います」

その団結力が発揮されたのは、高校3年生の春の大会。前年秋の大会では、ベスト8をかけての5回戦で強豪といわれる大阪商業大学堺高等学校に敗れた。中盤まで6点差でリードしており、あと1点でコールド勝ちという場面からのまさかの敗退だった。「僕らは絶対甲子園に出られるという自信があった。それが、気の緩みで一気に返されてサヨナラ負けしてしまった。この悔しさを胸に、大商大堺を倒すことを第一目標にして練習に取り組みました」。そして春の大会、1回戦で当たったのはなんとその大商大堺。以前よりも何倍もチームは団結しており、「このためにがんばってきた、その成果を出し切ろう」と試合に挑んだ。その甲斐あって、大量リードでの勝利。「この経験で自信がつき、夏の大会へと突き進むことができました」

プロ入団にあたり、西田さんは3割、30本、30盗塁という高い目標を掲げる。「厳しいプロの世界で、一から作り直すという思いです。1年目から1軍にあがるつもりでがんばります。瀬野監督の教えである『全力プレイ、全力疾走、元気』はどんな場面でも活かせることなので、忘れずに実践していきます」。関大一高時代に培った精神力やリーダーシップは、プロの世界でも遺憾なく発揮されることだろう。

デザイン力で 多極化時代の“極”に

「大阪のおっちゃん」と共通の泥臭さも大切だ」

●株式会社バルス 代表取締役社長
高島 郁夫 さん —経済学部 1979年卒業—

1992年、東京・天王洲にオープンした「Francfranc」(フランフラン)1号店のターゲットは、「25歳、ひとり暮らしのOL」だった。暮らしをカラフルに彩るインテリア・雑貨群は若い女性の圧倒的な支持を受け、今では国内外合わせて147店舗(2010年2月末時点)。感性豊かなライフスタイルを提案し、付加価値の高いデザイン力で時代の先端を走り続ける高島郁夫社長だが、実は「大阪のおっちゃん」に学んだ時代があった。



高島 郁夫—たかしま ふみお

■1956(昭和31)年、福井県生まれ。79年関西大学経済学部卒業。「Francfranc」を中心に「BALS TOKYO」「J-PERIOD」「About a girl」などのブランドで、デザイン性の高い事業を展開。今春、東京は銀座、青山に「Francfranc」の大型店、上海店をオープン予定。秋には新ブランドも立ち上げる。
www.bals.co.jp/



「大学時代はアルバイトに明け暮れて、授業にはほとんど出ませんでした。一緒に飲み明かした下宿の仲間とは連帯感がありましたが、同級生はなんだか子どもっぽく見えて仕方なかった。大学の勉強が社会と結びついているということが理解できず、それで楽しくなかったんだと思います。その一方で、体を動かせばお金が入ってくる。仕事をすれば失敗もあるけれど成功もある。自分が動いたことに対する跳ね返りがある。そのリアリティーが好きでした。だから、会社に入ってから仕事に没頭しました。休みなして夜遅くまでがむしゃらに働くことも、全く苦ではなかったですね」

福井県の家具メーカーに就職した高島さんは、大阪営業所に勤務。町の商人風の「大阪のおっちゃんたち」に「怒られて頭を小突かれながら」、多くのことを教わったという。2年後に東京へ移った高島さんは、次々に新しい企画を打ち出して営業・販売の実績を上げ、新規事業の子会社としてバルスを設立する。そして1996年にMBO(マネジメント・バイアウト)で親会社から経営権を取得して独立し、オーナー社長となった。02年にはジャストクック上場、05年東証一部上場、06年東証一部へ指定替えを果たす。その後、Francfrancは「他にない、おしゃれなインテリア雑貨がいっぱいの店」として、若い女性たちの注目の的となり、急成長を遂げた。その華やかな世界に目を奪われがちだが、高島さんは、小売業には「泥臭さ」が大切だという。

「どんなにかっこいい商品を扱おうが、基本的に物を仕入れて販売するという仕組みの中には泥臭いものがあるのです。ホコリが落ちていないか、商品が乱れていないか、挨拶をきちんとしているか、お客様の方をちゃんと向いて親身になって接客しているか。これらを必ずチェックし、感じ取るようにしていますし、口やかましく言っています」

バルスの企業理念は、デザインによって新たな付加価値を創造し、文化的で感性豊かなライフスタイルを提案すること。Francfrancのほかにも、「BALS TOKYO」「J-PERIOD」「About a girl」などのブランドを展開している。

「今は多極化の時代です。その極になれた企業だけが存在感を持ち、中途半端な会社は駄目になっていく。自分たちの領域で極になっていけばいい。世界で唯一無二の会社になれるんじゃないかと思いついてやっています」

高島さんは、卓球、野球、ゴルフ、サーフィンとスポーツ愛好家。ライフスタイルの中で大切な要素だそう。なかでもトライアスロンに本格的に取り組んでいる。「我々の仕事はプライベートが充実していないと、いい仕事はできない。会社にずっといて休みもなく働いているというのではなく、プライベートの充実度が仕事上でのアウトプットにつながるのです」

最後に関西大学に対して——。「大学の規模によるメジャー感ではなく、カラーとしてのメジャー感があればいいですね。関関同立の中でも関大はこういうところがいい、ここがすごい、といえるものを作り上げてほしい」